岡山大学教育学部研究集録　第137号（2008）13－27

グレン・アイラ市に住む高齢女性の暮らしとライフヒストリー（その4）

野邊　政雄

メルボルンのグレン・アイラ市に住む7人の高齢女性に，①日常生活，②ライフヒストリー，③何に幸福感を感じるかの3点に関して聞き取り調査を2005年9月におこなった。本稿では7人の語りを提示し，それに考察を加えた。

Keywords：高齢女性，メルボルン，パーソナル・ネットワーク，主観的幸福感，ライフヒストリー

(7) ジャネットさん

ジャネットさんは1937年生まれで，ユナイティング教会（Uniting Church）の教徒である。夫婦二人で，一戸建ての住宅に住んでいる。夫は1927年生まれである。彼女は公務員であったが，結婚を機に退職し，その後ずっと専業主婦をしている。彼女は生まれ育ったところの近くに住んでいる。彼女は両親と同じ教会にずっと所属してきた。2004年に次女の子供が幼くして亡くなったことから，家族の中に緊張が生まれた。しかし，次女に次の子供が生まれたことで，その緊張が和らいできている。

ジャネットさんは自分の健康状態を2と評価していたから，健康状態は比較的良いといえる。ロートンの活動能力指標によれば，彼女は10項目のうち9項目を「問題なくできる」と，1項目を「自分でできるけれども，むずかしい」と答えていたから，活動能力はとても高いと判定できる。ジャネットさんのパーソナル・ネットワークは，夫，2人の娘，1人の娘の夫，2人の孫，本人の1人の妹，本人の1人の従姉妹，本人の1人の姪，夫の1人の弟とその妻，夫の2人の従姉妹，2人の近隣者，23人の友人，1人の牧師，1人のソーシャル・ワーカーから構成されている。たくさんの友人がいるのは，彼女が同じ教会にずっと所属していて，多くの同年代の友人が教会にいるためである。社会関係を取り結ぶ相手は次のように地理的に分布している。本人の従姉妹は「ビクトリア州」にいる。夫の弟とその妻は「オーストラリア」にいる。夫の従姉妹のうち，1人は「ビクトリア州」におり，もう1人は「オーストラリア」に住んでいる。その他の親族はすべて「メルボルン」にいる。2人の近隣者は「近隣地域」におり，すべての友人，牧師，ソーシャル・ワーカーは「メルボルン」に住んでいる。ロートンのPGCモラール・スケールの得点は15点と，幸福感は高い。

ジャネットさんの年譜は，表7のようである。

①日常生活

私は朝7時から7時半の間に起きます。朝食を食べてから，新聞の暗号クロスワード（cryptic crosswords）をします。そのあと，家事をします。私は家事を得意でなく，いい主婦とは言えません。5日のうち少なくとも3日は買い物に行きます。ベントレー（Bentleigh，グレンアイラ市にあるサバーブ）に行きますが，そこに行くのが飽きたときは，グレンハントレー（Glen Huntly，グレンアイラ市にあるサバーブ）などに行くこともあります。夫のビルが退職したとき，私たちはそれぞれが自分の昼食を作ることにしました。私は料理をすることを好きですが，それ以外の家事をすることは嫌いです。料理をすることをとても楽しんでいます。夕食を6時半頃食べます。この頃は，早めに夕食を取るようになりました。そのあと，テレビを見てから，寝ます。私たちは11時半前に寝ることは決してありません。

岡山大学教育学部社会科教育講座　700－8530　岡山市津島中3－1－1
The Daily Life and Life History of Elderly Women in Glen Eira City, Melbourne -- Part IV
Masao NOBE
Department of Social Studies Education, Faculty of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Okayama City 700-8530

私はメルボルン劇団（Melbourne Theatre Company）の観劇会の会員（subscriber）です。友人たちも会員になっていて，私は友人たちと一緒に劇場に行きます。いくつの演劇に行くかを選ぶことができます。今年は10の演劇に行きます。私たちは今週の水曜日に昼興業（matinee）へ行きます。

私は読書会（book club）に所属しています。私は37年間その会に入っています。成人教育センター（Centre for Adult Education）から生まれた読書会です。1ヶ月に1度，互いのメンバーの家に集まって，本について議論します。みんなで本の目録を見て，読む本を決めます。11人がメンバーです。そのうちの8人は観劇会の会員です。私は読書会ができたときからのメンバーです。初めからのメンバーは，2人だけです。読書会を始めたころ，私たちは若い母親でしたが，今ではおばあさんです。長い間おつき合いがありますから，お互いの人生をよく知っています。夫が亡くなったとか，離婚したといったようなことです。また，私はその会の一員であるととても感じます。

金曜日には学校時代からのある友人と昼食を定期的に食べます。私たちはかつてたくさん歩いて昼食を少し食べたのですが，この頃では昼食を食べて少しだけ歩くようになってしまいました。彼女は膝が痛かったり，足首が悪かったりするので，私たちはかつてほど歩きません。

ビルと私は日曜日に教会に行きます。毎週の日曜日ではありません。教会はユナイティング教会です。その教会はもともと長老派教会（Presbyterian Church）でした。教会が他の宗派の教会と合併して1977年にユナイティング教会になったときは，びっくりしました。

私は，ブライトンにある英国国教会のガールズ・グラマー・スクールに通学していました。この学校に通っていた6人の友人たちと，年に4・5回会っています。また，彼女たちと連絡を取り合っています。

もう1つの集団にも入っています。この集団はもともと教会での交流から生まれました。メンバーは概して年寄りです。日曜日の午後に年に4・5回会って，昼食を一緒に食べます。かつては日曜日の夕方に会っていました。メンバーの多くは80歳くらいで，体の具合がよくありませんし，車の運転をするのがいやですから，この頃では日曜日の午後に会っています。

娘がガーデンベール小学校（Gardenvale Primary School）に行っていたとき，私たち夫婦は小学校の活動にとても係わっていました。そのときの生徒の両親たちとおつき合いが続いていて，年に4・5回会っています。この人たちと海外旅行をすることにしたことがあります。でも，ビルが直前に病気になって，旅行に参加できませんでした。

私はこのあたりでずっと暮らしてきました。ここから3・4キロのところで生まれました。（ジャネットさんは，グレン・アイラ市を構成する一つのサバーブであるガーデンベール生まれである。）この近くで生まれ育ったので，私たちは私の両親と同じ教会に属しています。

私はスコットランド系ですから，長老派教会に入っていました。長老派教会は他の宗派教会と合併して1977年にユナイティング教会になりました。そのとき，私たちの教会は合併に賛成しましたし，私もその合併を支持しました。でも，ジョン・ノックス教会が閉鎖されたとき，ユナイティング教会の中で長老派の信徒とメソディスト派の信徒との間に敵意が生まれました。私はユナイティング教会とならなかった長老派教会に入ることを考えるべきだとそのとき思いましたが，ユナイティング教会にそのままとどまっています。ユナイティング教会にとどまった一部の長老派の信徒は，その後，ユナイティング教会とならなかった長老派教会に移りました。

日曜日のミサの後に，教会に来た人たちとコーヒーや紅茶を飲みながら話をします。平日に，私たちは娘や孫と会います。でも，毎週に会うというわけではありません。

チェルテンハム（Cheltenham，メルボルンの中心から南東に18キロのところにあるサバーブ）に住む長女は働いていません。長女夫婦と孫は夜にこの家に来たりします。長女夫婦が外出するとき，私たちは孫の子守をしてあげます。二人の孫は大きくなって，学校へ行っています。私たちは孫の学校のさまざまな催し物にも行きます。こうしたときに，私たちは長女や孫と会います。

次女のジェシカはカーネギー（Carnegie，メルボルンの中心から東南東に11キロのところにあるサバーブ）に住んでいます。ここからそこまで3・4キロと，近くです。生まれて7週目の赤ちゃんがいます。この前の火曜日から，私たちは赤ちゃんと散歩するようになりました。次女の最初の子供は幼くして昨年の1月に死んでしまいました。それから，次女は誰ともつき合いを避けるようになりました。次の赤ちゃんが生まれたことで，ジェシカは人間関係を再び築いていっています。

次女の子供が死んだとき，インターチャーチ・チルドレンズ・アクティビティーズ（Inter-church Children's Activities）のソーシャル・ワーカーは私

たちをとても助けてくれました。祖父母のための夕べを何回か開いてくれました。娘の義理の母親（次女の夫の母親）と私がそれに出席しました。それによって，私は孫の死を受け入れることができるようになりました。教会の人たちや私の親しい友人も私たちを助けてくれました。このときは，私は教会に属していてよかったと思いました。

②ライフ・ヒストリー

私は1937年に生まれました。すべての祖父母はオーストラリア生まれです。曾祖父母はすべてスコットランドからの移民で，曾祖母はセントキルダ島（St. Kilda Island，スコットランドの西の沖合150キロほどにある島）の出身です。小学校は州立エルスタンウィック学校（Elsternwick State School）に行きました。中高等学校は英国国教会のガールズ・グラマー・スクール（Church of England Girls' Grammar School）に進みました。私の家族は長老派教会のメンバーでしたが，私を英国国教会系の学校に行かせたのは，近所に学校がなかったからです。長老派系の学校であるプレスベティリアン・レイディーズ・カレッジ（Presbyterian Ladies College）は，当時イースト・メルボルン（East Melbourne，メルボルンの中心の東隣にあるサバーブ）にありました。英国国教会のガールズ・グラマー・スクールは家から1マイル以内の近くにあり，私は自転車で通学できました。そこで，両親は私をガールズ・グラマー・スクールに入学させたのです。ガールズ・グラマー・スクールは進学校で，料理や裁縫といった家庭科は重視されませんでした。卒業後に，生徒は大学に進学することを期待されていましたし，最終学年の生徒の大部分は大学に進学していました。1950年に政府の奨学金（Commonwealth Scholarship）が設けられました。この奨学金が導入されたために，大学進学が大きく変わりました。男子生徒は優先的に奨学金をもらえましたが，もし女子生徒が奨学金をもらえるということになったときには，両親は娘を大学に進学させることを考えるようになりました。奨学金をもらえても，大学で学ぶためには費用がもっとかかりました。私はその奨学金をもらえることになりましたが，大学には進学しませんでした。

中等教育（matriculation）を終えて，1955年に連邦政府の防衛省に入り，公務員となりました。人事課で働きました。1959年に防衛省をやめ，学校時代の友人と外国に行きました。1年間イギリスに滞在し，ヨーロッパ大陸を6週間旅行しました。イギリスへは船で行きましたが，片道5週間かかりました。イギリスでは，オーストラリア通商委員会（Australian Trade Commission）で数ヶ月の間働き，お金を貯めました。そして，イギリス，スコットランド，スカンジナビア諸国を旅行しました。

メルボルンに戻ってから，連邦政府の文部省に勤めました。コロンボ計画（アジアと太平洋地域諸国の経済社会開発を促進することを目的として1950年に発足した機関である。その主要な活動は発展途上国の若者を先進国の大学に留学させるなどといった人材開発である。）を担当する課でした。ビルは文部省のシドニー事務所で働いていました。彼はメルボルンの事務所を監督するために，1962年にメルボルンに来て，そこに6週間いました。そのときに，私たちは知り合いました。私たちは1964年に結婚をしました。私の両親が結婚式を挙げた教会で私たちも結婚式を挙げました。結婚後，ビルはシドニーからメルボルンに来て，私たちはメルボルンにずっと住んでいます。1965年に長女のキャサリンが生まれました。次女のジェシカは1971年に生まれました。

長女が生まれて3ヶ月のとき，私の母親が59歳でとつぜん死にました。私は母親に子育てをたくさん助けてもらおうと期待していましたが，それがだめになってしまいました。その当時，私は自動車を運転できませんでしたから，赤ちゃんを抱えて生活がとてもたいへんでした。そこで，運転免許をまず

表7　ジュディスさんの年譜

年	（年齢）	出来事
1937年	（0歳）	出生
1955年	（18歳）	ハイスクールを卒業し，防衛省に勤め始める
1959年	（22歳）	1年間ヨーロッパ旅行をする
1960年	（23歳）	文部省に勤める
1964年	（27歳）	結婚。退職し，専業主婦となる。
1965年	（28歳）	長女が生まれる
1971年	（34歳）	次女が生まれる
2004年	（67歳）	次女の子供が幼くして死亡
2005年	（68歳）	次の子供が次女にできる

取りました。私が子供を産んだ頃，学校時代の友人たちのすべてにも子供ができました。赤ちゃんを連れて友人たちと昼食をどこかで一緒に食べたりしました。このために，生活が楽になりました。今でも学校時代の友人たちと昼食を一緒に食べています。ビルの友人たちはシドニーにいましたから，毎日の生活ではそうした人たちとおつき合いをすることはありませんでした。

私の友人の多くは結婚後も働いていました。でも，私は大学入学資格（matriculation）を取っていませんでしたし，仕事に就くのにふさわしい資格を持っていませんでしたから，結婚後は働きませんでした。（当時の多くの女性は義務教育で学校を終えていたから，ジャネットさんは2年間多く教育をうけていた。）私は40年ほど前に公務員でしたが，その当時，女性の公務員は結婚をしたらやめることになっていました。同じ仕事をしていても，女性公務員は男性公務員よりも1年間に154ポンド少なくしか給料をもらえませんでした。女性公務員の給料は男性公務員の給料よりも少なかったのですが，女性公務員の給料は男性公務員の給料よりも何パーセント少ないのかは分かりません。当時，専門職以外では，公務員というのは，女性も就けて，男性と同じ仕事をできる数少ない職業でした。当時の女性が就く職業といえば，タイピスト，工場労働者，銀行の窓口係ぐらいでした。私は事務員として連邦政府に勤めていました。私のように官庁の第3級の事務員となるには，最低でも11学年を終えていることが必要でした。第4級の事務補佐員は義務教育を終えて仕事に就きましたから，当時14歳で役所に入ったわけです。私が勤めていた役所にも数人の事務補佐員の少年がいて，ファイルの整理などの仕事をしていました。女性の事務員はそうした少年にも午前と午後にお茶を入れなければなりませんでした。

③何に幸福を感じるか

私には，夫，２人の娘，孫がいます。私は家族の生活を楽しんでいます。家族生活が私に生活で一番満足を与えてくれます。でも，いつも安楽な暮らしであったというわけではありません。ジェシカの子供が死んだ昨年は，とくにそうでした。ジェシカの最も親しい友人の1人が私に電話をくれました。彼女は双子です。ジェシカに子供ができた頃，その双子の友人にも子供ができました。双子の友人に年齢の近い子供がいるために，ジェシカは子供を失ったことに耐えられなくなりました。ジェシカは深い悲しみにうちひしがれました。そして，ジェシカと双子の友人との関係はこじれてしまいました。次の子供を産んだ今でも，幼くして最初の子供が死んだことを悲しんでいます。

ジェシカの一番の友人は二卵性双生児です。ジェシカは彼女たちと一緒に学校に行き，一緒に外国を旅行し，アパートに一緒に住んでいました。それぞれの結婚式のとき，新婦の付き添いをお互いにしました。双子の一人はジェシカよりも6ヶ月早く女の子を産み，もう一人はジェシカよりも8週間遅く女の子を産みました。ですから，その一番の友人たちがジェシカにとってストレスとなりました。緊張関係がジェシカと一番の友人たちとの間に生まれました。

私たちにとっても，昨年はとてもたいへんでした。とくに私にとっては，そうでした。子供を失った深い悲しみにうちひしがれて，ジェシカは私たちと話をしなくなってしまいました。矢面に立たないといけないのはしばしば母親です。でも，ジェシカに次の子供が生まれて，私たちとジェシカの関係はよくなってきています。

子供が親よりも前に死ぬなどということは，よもやないと思っていました。ところが，赤ん坊が死ぬということが起こってしまいました。孫の葬式の日，現実を思い知らされる機会がありました。スプリングベール（Springvale，メルボルンの中心から南東に22キロのところにあるサバーブ）にある子供のための墓地に赤ん坊を埋葬しました。そこにはそれまで行ったことはありませんでした。車から降りると，たくさんの小さな墓がその墓地にありました。そして，私たち家族に起こったような悲惨なことが他の人々にも起こっていることを知りました。

私たちの教会は小規模で，教会の活動を一緒にしますから，メンバーはお互いに知り合いです。そして，メンバーの一部は私の友人です。牧師さんや教会の人々は私をいろいろと助けてくれます。

私は教会で椅子にすわりながら，しばしば考え込んでいます。もし牧師さんが私は話を聞いているのでなく，考え込んでいることを知ったら，私をたぶん破門するかもしれません。自分自身とは別のものに基本的な信仰を持つことに意義があると思います。孫が死んだとき，私は教会のコミュニティに属していてよかったと思いました。教会の人たちは私を助けてくれました。

生きがいは家族や友人です。集団に新たに入ったり，新しい友人を作ったりはしません。これまでの友人とつき合うだけです。ですから，多くの友人は子供の頃からの友人です。12歳の頃から友人を知っています。私に子供の頃からの友人が多くいるのは，私が結婚後に外で働かなかったからでもありま

す。私は仕事をしていませんでしたから，実際に人と会うことはあまりありませんでした。私の友人の多くは仕事をしていましたが，そうした友人には年齢の違った友人がいます。

私と同年代の女性は結婚して仕事をやめても，たくさんの女性はそのあとで勉強をして，仕事に再び就いて活躍をしました。私はそうしませんでしたが，後悔をしていません。

私は友人にとても助けてもらっています。読書会や観劇会に入っていることで，私は新しい考えを持つことができたり，新しい体験をしたりすることができます。私は新聞の暗号クロスワードをして楽しんでいますが，ヒントから言葉が思い浮かばないとき友人に電話をよくします。今日の午後も友人に電話をして，クロスワードの言葉を一緒に考え，やっと言葉が分かりました。

5　考察

第１に，高齢女性と子供（夫婦）との関係について考察したい。まず，最も近くにいる子供がどこに居住しているかを見ておく。ジョーさんには子供がいなかったが，残りの６人の高齢女性には子供がいた。表８は，この６人の高齢女性にとって最も近くにいる子供がどこに居住しているかを示している。子供の居住場所は，①同居，②（同居を除外した）歩いて15分以内の地域（本稿では，「近隣地域」と呼ぶ），③（同居と近隣地域を除外した）サバーブ，④（同居，近隣地域，サバーブを除外した）メルボルン，⑤（同居，近隣地域，サバーブ，メルボルンを除外した）ビクトリア州，⑥（ビクトリア州以外の）オーストラリア，⑦外国，の７つに分けた。メルボルン大都市圏（以下では，メルボルン大都市圏を「メルボルン」という）は東西に120キロ，南北に124キロあり，その面積は8097平方キロメートルである。メルボルンはこのように広いから，子供が「メルボルン」に住んでいるとき，子供の住居は高齢女性の住居からどのくらい離れているかを表８に書き加えた。この表から，高齢女性に子供がいるとき，少なくとも１人の子供は「同居」，「近隣地域」，10キロ以内の「メルボルン」のいずれかに住んでいることが分かる。つまり，そうした高齢女性には，少なくとも１人の子供が高齢女性の住居から10キロ以内の場所に住んでいるのである。

子供の居住場所を別の視点から見ておきたい。子供のいる６人の高齢女性には，16人の実子と２人の義理の子供（夫の子供）がいた。その18人の居住場所をまとめると，表９のようになる。この表から，18人の子供のうち16人がメルボルンの内部（「同居」，「近隣地域」，「メルボルン」のいずれか）に住んでいることを読み取ることができる。このように，高齢女性のほとんどの子供（88.9％）はメルボルンの内部に居住しているのである。「メルボルン」に住んでいる子供12人について，子供の住居は高齢女性の住居からどのくらい離れているかをやはり表９に示す。この表から，「メルボルン」に住む12人の子供のうち10人が高齢女性の住居から10キロ以内の場所に住んでいることが分かる。このように，高齢女性の子供たちは「メルボルン」の中でいろいろな場所に分散して住んでいるのではなく，そのほとんどは高齢女性の住居から10キロ以内の近くに住んでいるのである。そして，18人の子供のうち14人（77.8％）が10キロ以内の場所に住んでいるのである。

紹介した高齢女性の事例の中では，レスリーさんが40歳の独身の娘と同居していた。これ以外には，高齢女性が子供（夫婦）と同居しているという事例はなかった。別居しているからといっても，高齢女性とその子供（夫婦）は助け合うことがないとか，交際しないということではない。高齢女性は，子供（夫婦）をいろいろと支援していた。多くの高齢女性がおこなっていた支援は，孫の世話であった。レスリーさんは，近所に住む孫娘の送迎をしてあげたり，両親が帰宅するまで孫娘をあずかって世話をしてあげたりしていた。また，彼女は別の娘が子供を

表８　最も近くにいる子供の居住場所

高齢女性の名前	年齢	子供の性別	子供の年齢	子供の居住場所	子供の居住場所までの距離
レスリー	70歳	娘	40歳	同居	
ジョー	78歳	子供はいない			
マリリン	65歳	娘	43歳	近隣地域	
ジュディス	72歳	娘	42歳	メルボルン	５キロ
ノーマ	77歳	息子	54歳	メルボルン	３キロ
パム	75歳	娘	48歳	メルボルン	10キロ
ジャネット	68歳	娘	33歳	メルボルン	３キロ

（注）子供が「メルボルン」に住んでいるとき，子供の居住場所までの距離を示した。

表９　すべての子供の居住場所

高齢女性の名前	年齢	子供の性別	子供の年齢	子供の居住場所	子供の居住場所までの距離
レスリー	70歳	息子	45歳	メルボルン	4キロ
レスリー	70歳	息子	45歳	メルボルン	26キロ
レスリー	70歳	娘	43歳	オーストラリア	
レスリー	70歳	息子	43歳	近隣地域	
レスリー	70歳	娘	41歳	ビクトリア州	
レスリー	70歳	娘	40歳	同居	
レスリー	70歳	夫の娘	43歳	近隣地域	
レスリー	78歳	夫の娘	35歳	メルボルン	2キロ
マリリン	65歳	娘	43歳	近隣地域	
マリリン	65歳	息子	41歳	メルボルン	6キロ
ジュディス	72歳	息子	48歳	メルボルン	12キロ
ジュディス	72歳	娘	42歳	メルボルン	5キロ
ジュディス	72歳	息子	41歳	メルボルン	7キロ
ジュディス	72歳	息子	38歳	メルボルン	6キロ
ノーマ	77歳	息子	54歳	メルボルン	3キロ
パム	75歳	娘	48歳	メルボルン	10キロ
ジャネット	68歳	娘	40歳	メルボルン	8キロ
ジャネット	68歳	娘	33歳	メルボルン	3キロ

（注）子供が「メルボルン」に住んでいるとき，子供の居住場所までの距離を示した。

連れて地方の町からメルボルンに来るとき，孫の世話をしてあげていた。マリリンさん，ノーマさん，ジャネットさんは孫の子守をしてあげていた。娘が忙しいとき，パムさんは孫の送迎をときどきしてあげていた。高齢女性は孫の世話以外の支援も子供（夫婦）にしていた。子供たちの家が留守であることを他人に知られないように，レスリーさんは子供たち宛の郵便物を自宅で受け取ってあげていた。マリリンさんは娘の家や娘が所有する貸家の世話をしてあげていた[11]。

高齢女性は子供（夫婦）をいろいろと支援していたけれども，子供（夫婦）に支援を受けている高齢女性はあまりいなかった。マリリンさんは娘がどのような支援をしてくれるか具体的に語らなかったけれど，「娘は私にとてもよくしてくれる」と言っていた。ジュディスさんの夫が入院していたとき，子供夫婦がジュディスさんの家に一緒に住んでくれた。子供（夫婦）に助けてもらっていた高齢女性が少なかったのは，調査した高齢女性が比較的元気であり，その高齢女性の子供（夫婦）が子育て中でより支援を必要としていたからと考えられる。

ところで，マリリンさんの母親はまだ生きており，マリリンさんは母親をどのように世話をしているかを話していた。また，パムさんの母親はすでに亡くなっていたが，パムさんは母親をかつてどのように世話したかを話していた。これらの語りから，体力の衰えた後期高齢者は，成人した子供からどのような支援を受けているかを知ることができる。マリリンさんは彼女の母親に次のような支援をしていた。マリリンさんは1993年に母親の家をフラットに建て替えをしてあげ，その経費の捻出をしてあげた。その母親は一人暮らしをしてきたが，自立して暮らせなくなって，老人ホームに入居した。マリリンさんは母親が老人ホームにいるのに必要な経費を工面するために母親の所有するフラットを貸し出したが，マリリンさんはそのフラットの管理・維持をしてあげていた。さらに，マリリンさんは老人ホームの母親を１週間に１度ほど訪問していた。母親が転倒してあごやほおの骨を折ったとき，マリリンさんは老人ホームに毎日行き，母親の看護をした。それから，パムさんの母親は生きていたとき，パムさんの家のすぐ近くに住んでいた。パムさんは母親の家を１日に３回行って，母親の世話をしていた。このように，後期高齢者は負担の大きい手段的サポートを別居する子供から受け取っていた。

高齢者（夫婦）と別居する子供（夫婦）が交際することも盛んであった。ノーマさんの息子はノーマさんに毎朝電話をしてきた。また，その息子は木曜日の夜にノーマさんの家に来て，夕食をノーマさんと一緒に取っていた。ジュディスさんは娘の家族と一緒に国内旅行をしたり，娘夫婦が所有する別荘に娘の家族と一緒に行ったりしていた。また，彼女は息子や孫たちと一緒にフットボールの試合の観戦に行ったり，孫たちの学校のコンサートに行ったりし

ていた。

両親が成人した子供の家族と別居して暮らしながら互いに助け合うという家族形態は，修正拡大家族（modified extended family）と呼ばれている。近代産業社会では，職業移動や地理的移動が盛んになる。リトワック（Litwak 1960a, 1960b）は，修正拡大家族が近代産業社会に適合的な家族の形態であると論じた。この研究に影響を受けて，オーストラリアでも調査・研究がおこなわれた。マルティン（Martin 1967）は住民の社会階級で相違するアデレードの3つの地域で1965年から1966年にかけて調査をおこない，核家族で暮らす夫婦が自分たちの両親やきょうだいとどのように助け合い，交際をしているかを明らかにした。まず，中産階級の夫婦は家族としての自立性を大切にし，親族に頼りすぎることはしないようにしていたけれども，その多くは両親を始めとする近親者から実際にかなりの援助を受けていた。そして，中産階級の夫婦は余暇活動を友人とよくするが，助け合いは近親者とよくするというように，親族，近隣者，友人を機能的に使い分けていた。次に，中産階級と労働者階級の住民が混在した地域に住む上層労働者階級の夫婦は伝統的なイギリスの労働者階級の生活様式に近く，最も親族中心の暮らしをしていた。そうした夫婦にとって，親族は近くに住む近隣者であり，親しい友人でもあった。しかし，近くに住むそうした親しい親族は他の場所に移動していっていた。それから，低家賃の住宅公社の賃貸住宅に住む下層労働者階級の夫婦にはアデレードに多くの親族がいた。けれども，そうした夫婦は交通手段や通信手段（電話，車，公共交通機関）をあまり利用できないので，一部の親族としか交際できなかった。下層労働者階級の夫婦にとって親しい友人は近隣者であった。下層労働者階級の夫婦が親族と交際できないとき，そうした夫婦の近隣関係はとても親密であった。このような違いが社会階級で相違した夫婦の間にあったけれど，いずれの地域においても夫婦は両親と助け合い，交際していた。本稿で紹介した高齢女性は子供（夫婦）と助けあい，交際していたが，余暇活動は主に友人とするというように，社会関係を使い分けていた。とすると，そうした高齢女性は親族との交際や助け合いの仕方でマルティンが調査した中産階級の夫婦に近いといえる。

修正拡大家族と呼ばれる，親密な異居近親関係がメルボルンで可能であった理由として次のようなことをあげることができる。まず，高齢女性の子供（夫婦）の多くが近くに住んでいることである。前述したように，高齢女性の別居する子供（夫婦）のほとんどは，高齢女性の住居から10キロ以内の場所に居住していた。子供（夫婦）が地理的に近くに居住しているから，高齢女性はそうした子供（夫婦）と助け合ったり，頻繁に交際したりしやすい。次に，高齢女性が車の運転をできることである。聞き取り調査に加えて，調査対象者に調査票による調査もおこなった。その質問の1つで，筆者は調査対象者に車の運転ができ，自らが運転する車があるかどうかを尋ねた。これによると，紹介したすべての高齢女性は車の運転ができ，自らが運転する車を持っていた。高齢女性は時間に縛られることなく，メルボルンの中を自由に移動できるから，子供（夫婦）を支援したり，子供（夫婦）と交際したりしやすい。これらの理由から，メルボルンの高齢女性は子供（夫婦）と助け合ったり，頻繁に交際したりできるのだろう。

修正拡大家族がメルボルンで一般的に見られると述べたけれど，レスリーさん夫婦は40歳のレスリーさんの娘と同居していた。これは，住宅の値上がりが顕著であることによると考えられる。メルボルンでは最近の10年間の間に，不動産の価格は数倍となったので，若い人々は住宅を借りにくくなったり，住宅を購入しにくくなったりした。成人した人は自立して暮らすべきだという規範がオーストラリアにある。しかし，背に腹は替えられないから，レスリーさんの娘はレスリーさん夫婦と同居していたのだろう[2)]。

高齢者はたいてい子供（夫婦）と別居して暮らしているから，高齢者は人生のそれぞれの段階に合った家屋に移り住んでいることにも着目しておきたい。子供たちが巣立ち，夫が死亡して，ジュディスさんは一人暮らしになった。だから，広い庭のある一戸建て住宅は彼女にとって維持・管理がたいへんなものとなった。そこで，調査のあとしばらくして，彼女は高齢者用の施設に移った。ノーマさんは老人となってから，大きな家を維持・管理することが大きな負担となった。また，同居していたパートナーは病気となり，家の手入れをする作業ができなくなった。これらのことから，ノーマさんは1997年により小さな一戸建て住宅に移った。ただし，彼女がそれまで住んでいたのはベントレーであり，同じ市内にある近くの家に移り住んでいることを見落としてはならないだろう。移り住んだあとも，それまで慣れ親しんだ生活環境のもとで暮らし続けようとしていると考えられる。

第2に，高齢女性とその女性のきょうだい（＝兄弟姉妹）との関係を考察したい。まず，最も近くにいるきょうだいの居住場所を見ておく。表10は，

表10　最も近くにいるきょうだいの居住場所

高齢女性の名前	年齢	きょうだいの性別	きょうだいの年齢	きょうだいの居住場所	きょうだいの居住場所までの距離
レスリー	70歳	弟	68歳	サバーブ	
ジョー	78歳	妹	71歳	メルボルン	33キロ
マリリン	65歳	妹	62歳	メルボルン	22キロ
ジュディス	72歳	妹	69歳	メルボルン	5キロ
ノーマ	77歳	弟	74歳	オーストラリア	
パム	75歳	妹	71歳	メルボルン	18キロ
ジャネット	68歳	妹	62歳	メルボルン	8キロ

（注）きょうだいが「メルボルン」に住んでいるとき，きょうだいの居住場所までの距離を示した。

最も近くにいるきょうだいがどこに居住しているかをそれぞれの高齢女性ごとに示している。子供の居住場所の分類と同じように，きょうだいの居住場所は，①同居，②（同居を除外した）歩いて15分以内の地域（本稿では，「近隣地域」と呼ぶ），③（同居と近隣地域を除外した）サバーブ，④（同居，近隣地域，サバーブを除外した）メルボルン，⑤（同居，近隣地域，サバーブ，メルボルンを除外した）ビクトリア州，⑥（ビクトリア州以外の）オーストラリア，⑦外国，の7つに分けた。きょうだいが「メルボルン」に住んでいるとき，きょうだいの居住場所は高齢女性の住居からどのくらいの距離にあるかも示しておいた。表10から，ノーマさんには最も近くにいるきょうだいは「オーストラリア」にいるが，その他の6人の高齢女性にはもっとも近くにいるきょうだいはメルボルンの内部（「サバーブ」あるいは「メルボルン」）にいることが分かる。最も近くのきょうだいが「メルボルン」にいる5人の高齢女性のうち，そのきょうだいが10キロ以内に住んでいるのは2人である。だから，最も近くにいるきょうだいが10キロ以内の場所に住んでいる高齢女性は7人のうち3人だけである。前述のように，高齢女性に子供がいるとき，少なくとも1人の子供は10キロ以内に住んでいた。したがって，最も近くのきょうだいは最も近くの子供よりも遠方に住んでいる傾向がある。

ところで，7人の高齢女性には，10人のきょうだいがいた。その10人の居住場所をまとめると，表11のようになる。この表から，10人のきょうだいのうち8人がメルボルンの内部（「サバーブ」あるいは「メルボルン」）に住んでいることを読み取ることができる。このように，大部分のきょうだいはメルボルンの内部に居住している。「メルボルン」に住んでいるきょうだい7人について，高齢女性の住居からどのくらいの距離のところに住んでいるかをやはり表11に示しておいた。これから，「メルボルン」に住む7人のきょうだいのうち，2人が「10キロ以内」の場所にいることが分かる。だから，10人のきょうだいのうち3人（33.3%）が10キロ以内の近くに住んでいる。前述したように，77.8%の子供が高齢女性の住居から10キロ以内の場所に住んでいた。したがって，きょうだいは子供よりも遠方に住む傾向が見られる。

アラン（1989=1993: 144-8）や吉原（2006: 50-2）は，高齢者にとってのきょうだい関係について次のことを指摘している。まず，高齢者はそのきょうだいと幼いときからずっと交際をしてきており，同じ時代を生きることできょうだいと体験を共有してい

表11　すべてのきょうだいの居住場所

高齢女性の名前	年齢	きょうだいの性別	きょうだいの年齢	きょうだいの居住場所	きょうだいの居住場所までの距離
レスリー	70歳	兄	72歳	メルボルン	35キロ
レスリー	70歳	弟	68歳	サバーブ	
ジョー	78歳	姉	80歳	ビクトリア州	
ジョー	78歳	妹	71歳	メルボルン	33キロ
マリリン	65歳	妹	62歳	メルボルン	22キロ
ジュディス	72歳	妹	69歳	メルボルン	5キロ
ノーマ	77歳	弟	74歳	オーストラリア	
パム	75歳	妹	73歳	メルボルン	18キロ
パム	75歳	妹	71歳	メルボルン	18キロ
ジャネット	68歳	妹	62歳	メルボルン	8キロ

（注）きょうだいが「メルボルン」に住んでいるとき，きょうだいの居住場所までの距離を示した。

る。それゆえに，高齢者はきょうだいと「互いの経験を確認し，その個性の意義を認め合うこと」ができる。このことによって，きょうだいは高齢者に「意味と連続性を提供するのに役立つ」（吉原 2006: 51)。次に，高齢者とそのきょうだいは年齢が近いことから，類似した関心を持ち，世の中の出来事を同じ視点から解釈したり，理解したりできる。それから，高齢者とそのきょうだいは人生が尽きつつあるという認識を持っているから，過去のよかった出来事や悪かった出来事をともに思い浮かべることができる。だから，高齢者にとってきょうだいというのは，友人のように，関心を共有し，心から同感しあいながら話ができるような親しい相手なのである。

紹介した高齢女性は，次のような助け合いや交際をきょうだいとしていた。ジョーさんは夫とともに妹夫婦のところに２週間から３週間に１度行ってブリッジをして，夕食を一緒に食べていた。また，ジョーさんはその妹と電話でよく話ししていた。そして，ジョーさんは「妹とはとても親密です」と妹との関係を話していた。その妹や姉はジョーさんの家によく来ていた。ジュディスさんは火曜日にときどき妹と昼食と食べていた。そして，ジュディスさんは「妹とは友人のような関係です」と言っていた。ノーマさんは入院したとき，弟が世話をしてくれた。パムさんは日曜日の夜に妹の家へ行って，一緒に夕食を食べていた。さらに，パムさんは妹を含めた家族や親族と年に６回会っていった。こうして見ると，高齢女性が助け合ったり，交際をしたりしているきょうだいは女きょうだいが多い。これは，女性は男性よりも平均寿命が長いため，生きている女きょうだいは男きょうだいよりも多いからかもしれない。それから，ノーマさんだけは弟に助けてもらったが，ジョーさん，ジュディスさん，パムさんの３人は女きょうだいと交際していた。とすると，高齢女性にとってきょうだいは助け合う相手というよりも交際する相手だといえるだろう。そして，ジョーさんとジュディスさんが表現していたように，高齢女性にとって同性の女きょうだいとの関係は友人のように親しいものであった。そうすると，アランや吉原の指摘は，高齢女性の場合，同性の女きょうだいとの関係に当てはまる[3)]。

第３に，友人関係についてである。紹介した高齢女性のうち，ジュディスさんは日を決めてはいなかったけれど，かつて職場の同僚であった友人と頻繁に会っていた。ノーマさんは40年来の友人と火曜日に，別の友人と木曜日に会って食事をしていた。ジャネットさんは学校時代からの友人と金曜日に会っていた。ところで，筆者は日本で高齢女性がどのように友人と会っているのかを事例調査にもとづいて考察したことがある（野邊 2006)。この調査によれば，ノーマさんやジャネットさんのように，レストランや喫茶店などで毎週曜日を決めて定期的に会っているという高齢女性は日本にはいなかった。筆者がメルボルンでおこなった事例調査の調査対象者がどのくらい一般的か分からないけれど，毎週曜日を決めて定期的に会うといった友人とのつき合い方はメルボルンの高齢女性に独自に見られるものかもしれない。今後，高齢女性の友人とのつき合い方に注目し，それを探究してゆく必要があるだろう。

ところで，高齢女性たちは友人関係が形成されるきっかけについても語っていた。子供たちが小さかったとき，マリリンさんは専業主婦をしており，子供たちを習い事に連れて行った。そして，子供を習い事に連れて行くと，他の母親たちと人間関係が生まれた。マリリンさんはそのときにできた友人の一部と現在でもつき合っていた。それから，ジャネットさんは結婚後ずっと専業主婦をしていた。子供たちが小学校に通学していたとき，ジャネットさん夫婦は小学校の活動に深く係わっていた。そのときに他の生徒の両親と人間関係が生まれた。そして，ジャネットさんは現在でもそのときにできた友人とつき合っていた。こうして見ると，専業主婦をしている女性は学校に通う子供を介して他の母親たちと友人関係を作りやすいことが分かる。そして，こうして形成された友人関係は，高齢期の女性が保有する友人関係の一部となっているのである。次に，ジャネットさんはずっと同じ教会に所属しているので，同年代の教会のメンバーに友人が多かった。また，彼女には学校時代にできた友人がいた。それから，ジュディスさんはもとの職場の同僚と頻繁につき合っており，もとの職場の同僚は友人の一部となっていた。

第４に，高齢者のパソコンに利用についてである。近年におけるパソコンの普及には目を見張るものがある。そこで，どのくらいの高齢者がパソコンを利用しているかを知るために，筆者は岡山県北のある山村で65歳以上80歳未満の高齢女性約100人にパソコン利用の有無を2005年に尋ねたことがある。しかし，パソコンを使っている高齢女性はいなかった。これに対し，紹介した７人の高齢女性のうち，２人がパソコンを日常生活で使っていた。マリリンさんはパソコンを利用して，ホームページの閲覧や電子メールをしていた。さらに，インターネットを使って商品の購入もしていた。パムさんはパソコンを使って，電子メールをしたり，ゲームをしたりし

ていた。こうしたことから，メルボルンではかなり多くの高齢者はパソコンを使えると考えられる。パソコンが登場する以前では，対面的な交際や電話・手紙による接触によって，人々は他者との社会関係を維持してきた。パソコンが登場してからは，人々は電子メールで遠くにいる他者とも容易に連絡を取り合えるようになった。マリリンさんには，1週間に1度ほど電子メールで連絡を取り合っている人が国内や海外に10人ほどいた。パムさんはヨーロッパ旅行中の娘の家族と電子メールで連絡を取り合っていた。マリリンさんやパムさんのように，メルボルンの高齢女性は電子メールを利用することによって，社会関係を広げている。

第5に，集団加入についてである。紹介した高齢女性の中に，趣味の集団に加入している女性が多いことが目を引く。レスリーさんはスクラブルのクラブと読書会に加入していた。ジョーさんはブリッジを友人や妹夫婦と定期的にしていた。マリリンさんは家系研究会に入っていた。ジュディスさんは老人大学，2つの読書会，教会の研修会に入っていた。ノーマさんはトランプをするグループに入っていた。ジャネットさんは読書会と観劇会に入っていた。また，自らがプレイをするスポーツの団体にも2人の高齢女性が加入していた。レスリーさんはスクワッシュを，パムさんはクロケーをしていた。紹介した高齢女性が趣味の集団やスポーツの団体にこのようによく加入していたのは，紹介した高齢女性が経済的に困窮しておらず，自己啓発活動やスポーツをおこなうゆとりがあるからだろう。また，そうした女性は車を自ら運転してメルボルンの中を自由に移動できるからでもあるからだろう。としてみると，そうした集団や団体へ加入することは，中産階級の高齢女性に見られる生活様式といえるのかもしれない。

さまざまな集団の中で，教会への係わりは一部の高齢女性にとってとても重要であった。7人の高齢女性のうち，レスリーさん，ジュディスさん，パムさん，ジャネットさんの4人が教会と係わりを持っていた[4)]。4人の高齢女性はたんに教会のミサに出席するというだけではなかった。教会はその以上の働きをしていた。

まず，高齢女性は教会のミサなどに行くことによって，古くからの友人と会って，交際することができることである。高齢者は子供の自立や退職などによって社会的な役割を失うから，他の人々と友人関係を形成するきっかけがあまりない。ただし，高齢者は同年代の人々と友人関係を取り結びやすいし，そうした人々との友人関係を保持しやすい（Allan 1989=1993: 147-8）。ところで，ジャネットさんは現在住んでいる場所の近くで生まれ育ち，両親が通っていた教会に今でも行っていた。彼女は一生涯にわたって同じ教会に所属しているから，お互いのことをよく知っている同年配の人々が教会には多くいる。彼女が教会に行けば，そうした人々と会って共感を持って話し合うことができ，会話を楽しむことができる。ジャネットさんのように一生涯にわたって同じ教会に所属していなくとも，高齢女性は同じ教会に長い間所属している。だから，高齢女性には，お互いをよく知っている同年配の人々が教会に多くいる。高齢女性が教会に行くと，同年代のそうした知人や友人に会って，交際することができるのである。

次に，教会に所属することによって，ミサ以外のさまざまな活動に参加できることである。レスリーさんは教会の福祉団体に係わっていたし，オプショップの店員としてボランティアで働いていた[5)]。ジュディスさんは教会の研修会に参加していた。パムさんは教会の扶助グループの運営をしていた。ジャネットさんは教会での交流から生まれた集団に入っており，ときどきそのメンバーと一緒に昼食を取っていた。高齢女性は退職などによって社会的な役割を喪失するから，社会との繋がりがなくなってしまう。ところが，教会に所属すると，さまざまな活動にも参加できるから，社会との繋がりを保持することができる。

それから，教会は高齢者に情緒的サポートを提供することである。ジュディスさんの息子が亡くなったとき，教会の牧師が彼女のところに来て，慰めてくれた。また，ジャネットさんの孫が死んだとき，教会のメンバーが彼女を精神的に助けた。このように，高齢女性が悲境に陥ったとき，教会の牧師やメンバーは情緒的サポートの源泉となるのである。

以上のように，教会は高齢女性にとってミサに出席するためだけのものでない。教会に行くことで同年代の友人や知人と交際する機会ができ，教会のさまざまな活動に参加することで社会と繋がりを持つことができる。また，教会は高齢女性に情緒的サポートを提供する。パムさんが「家族の次に大切なのは，教会です」と言うように，教会は高齢女性の生活で重要な役割を演じているのである。

第6に，ボランティア活動や慈善事業の活動についてである。紹介した7人の高齢女性のうち，5人がそうした活動をしていた。レスリーさんは教会が経営するオプショップでボランティアの店員をしていた。ジョーさんは友人たちがしている慈善事業の活動を支援していた。ジュディスさんは，若い頃，

教会においてボランティアで寄付集めをしていたし，現在でも，コミュニティ・インフォメイション・センターでボランティアとして恵まれない人たちのために働いていた。ノーマさんはいくつかの団体でボランティアの仕事をしたり，そうした団体に寄付をしたりしていた。パムさんは慈善事業をする団体で委員会のメンバーとなるなどして，慈善事業に係わっていた。このように多くの高齢女性がボランティア活動や慈善事業の活動に係わっていたのは，紹介した高齢女性が経済的にも時間的にもゆとりのある中産階級であるからだろう。

第７に，女性の就業についてである。マリリンさんは子供が生まれたあとに専業主婦となったが，そのことについて「当時，子供ができても仕事を続けるなんて考えられませんでした」と言っていた。また，ジャネットさんは学校を卒業したあと公務員をしていたが，女性の公務員は結婚したらやめることになっていたので，退職をした。紹介した高齢女性が最初の結婚をしたのは，1949年から1961年までの間である。彼女たちが語っていたように，その当時，結婚や出産をしたら専業主婦になるのが社会の常識であり，性による就業の不平等があった。

1972年に政権を取ったウィットラムが率いる労働党政権（1972-75年）は，連邦政府の雇用で女性の機会均等を義務づけた。また，連邦強制調停仲裁委員会は1969年に「同一労働同一賃金」の原則を採用したので，女性は同じような仕事をしている男性と同じ賃金をもらえるようになった。しかし，この原則は，看護師や秘書のように女性が主に就く職業には適用されなかった。この意味で，性別による賃金格差が解消されたわけではなかった。同委員会は1972年に「同一価値労働同一賃金」の原則を採用した。そして，女性が主に就く職業であっても，仕事の重要性や価値にもとづいて女性の賃金が決められるようになった。こうして，性別による賃金格差が縮小していった。これらの改革がおこなわれた結果，女性が男性と同じように働ける環境が整い，女性の社会進出が進んでいった。

マリリンさんとジュディスさんは，子供が少し成長してから1970年代に再就職した。また，ノーマさんは1969年に室内装飾業の卸売店での仕事についた。これら３人の女性がその後ずっと仕事を続けていたのは，女性の働く環境が改善され，女性の社会進出が進んだ時代であったからだろう。レスリーさんとパムさんは自営業の仕事についていた。ジョーさんは看護師という女性が主に就く仕事についており，夫婦に子供がいなかったから，ずっと仕事を続けていたのだろう。いずれにせよ，紹介した７人の高齢女性のうち，結婚後もずっと専業主婦であったのはジャネットさんだけで，他の６人は仕事に就いていた。このことは，オーストラリアで1970年頃から女性の社会進出が進んだことと軌を一にしている。

第８に，離婚についてである。ノーマさんは1956年に，パムさんは1988年に離婚をした。オーストラリアではかつては離婚することがむずかしかったし，離婚した人々に対して社会的な偏見があった。社会的な偏見があったので，ノーマさんは「最初の夫との離婚に罪悪感を覚える」と言っていたと思われる。その後，1975年の家族法の改正（Family Law Act 1975）で，結婚当事者に過失がなくとも，少なくとも１年間の婚姻の破綻があれば，離婚が成立することになった。離婚することが容易になったので，それが施行された1976年には，63,230件もの離婚がオーストラリア家庭裁判所で認められた。そして，1975年に1.8であった離婚率（人口1000人あたりの離婚件数）は，1976年に4.5に跳ね上がった。これは，それまで離婚を抑えていた人々が法律の改正を機に離婚申請をしたからである。その後，離婚率は1979年まで急激に低下し続け，それ以降，離婚率は2.4から2.9の間を変動している（ABS 2007a; Gilding 1997: 193-4）。長期的に見ると，結婚が離婚で終わる蓋然性は高くなっており，2000年から2002年におこなわれた結婚の33％は離婚で終わるだろうと予想されている（ABS 2007b）。離婚した女性の経済的な困窮や離婚による子供の苦悩といったことはしばしば指摘されている（Gilding 1997: 221-2）。しかし，家族法の改定以来，離婚する人々が社会の中で増えているので，離婚した本人やその子供への社会的な偏見はほとんどなくなっている[6)]。だから，1988年に離婚したパムさんは，離婚した直後は悲しかったと言っていたけれど，それからはさまざまと人生を歩んでいたのだろう。

第９に，幸福感について考察したい。７人の高齢女性のうち，幸福感が特に低かったのはジュディスさんとノーマさんであった。ロートンのPGCモラール・スケールの得点は，ジュディスさんが3.5点，ノーマさんが8.5点であった。この２人の高齢女性に特有のことは，精神的にとても頼りにしていた夫やパートナーを数年前に亡くしたことである。そこで，親しい人間を失ったために，ジュディスさんとノーマさんの幸福感が低下したということを推論できる。夫がいない高齢女性は夫のいる高齢女性よりも幸福感が高いという調査結果があるが（古谷野1992），メルボルンの高齢女性の事例調査では，そうではなかった。

第10に，1929年にアメリカで始まった大恐慌についてである。紹介した7人の高齢女性のうち3人は，幼い頃の家庭生活が大恐慌という荒波にもまれたということを話していた。まず，レスリーさんの両親は借家の家賃を払えなくて，一家で夜逃げをした。次に，マリリンさんの両親は安定した仕事に就けるまで結婚を延ばしたので，母親が30歳を超えてから最初の子供であるマリリンさんを生んだ。それから，パムさんが子供の頃，両親はあまり裕福でなかったので，パムさんたちは動物脂肪をぬったパンをよく食べた。そのために，彼女は今でもお金のむだ遣いをしないという。これらのことから，大恐慌は高齢女性の幼い頃の家庭生活や現在の性格形成に影響を与えていたことが分かる。

6　要約

メルボルンのグレン・アイラ市に住む7人の高齢女性に，①日常生活，②ライフヒストリー，③何に幸福感を感じるかの3点に関して聞き取り調査を2005年9月におこなった。本稿では7人の語りを提示し，それに考察を加えた。そして，次の10点を明らかにした。

⑴高齢女性の成人した子供（夫婦）のほとんどは，高齢女性の住居から10キロ以内の近くに住んでいた。高齢女性はそうした子供（夫婦）と助け合っていたが，高齢女性が子供（夫婦）をよく助けていた。そして，高齢女性が子供（夫婦）におこなっていた主な支援は孫の世話であった。また，高齢女性は子供（夫婦）と頻繁に交際していた。

⑵高齢女性のきょうだいのほとんどはメルボルンにいたが，子供（夫婦）よりも遠方に住んでいた。高齢女性にとって，きょうだいは助け合う相手というよりも交際をする相手であった。そして，高齢女性にとって同性の女きょうだいとの関係は友人のように親しいものであった。

⑶一部の高齢女性は毎週曜日を決めて友人と定期的に会っていた。専業主婦をしていた女性は，学校に通う子供を介して他の母親と友人関係を形成する。こうして生まれた友人関係がその後も保持され，高齢女性の友人関係の一部となっていた。さらに，同年代の教会のメンバー，学生時代の友人，もとの職場の同僚が高齢期にある女性の友人となっていた。

⑷パソコンを利用する高齢女性が多い。そのために，高齢女性の社会関係が広がっている。

⑸趣味の集団や自らプレイをするスポーツの団体に加入している高齢女性が多かった。また，教会に所属している高齢女性が多かった。高齢女性は教会に行くことで同年代の友人や知人と交際する機会を持つことができ，教会のさまざまな活動に参加することで社会と繋がりを持つことができた。さらに，教会は高齢女性に情緒的サポートを提供していた。

⑹ボランティア活動や慈善事業の活動に係わる高齢女性が多かった。

⑺女性が働く環境がオーストラリアでは1970年頃から改善していった。そこで，高齢女性の多くは結婚や子育てで退職しても再就職してずっと働き続けていた。

⑻1975年に家族法の改正があり，簡単に離婚ができるようになった。離婚する人々が社会の中で増加しているので，離婚した本人やその子供への社会的偏見はほとんどなくなっている。

⑼精神的に頼りにしていた夫やパートナーを最近亡くした高齢女性は幸福感がとても低かった。

⑽大恐慌は高齢女性の幼い頃の家庭生活や現在の性格形成に影響を与えていた。

(注)

1）調査票による調査では，高齢女性がそれぞれの子供にどのようなソーシャル・サポートを期待することができるか，および，過去3ヶ月以内にそれぞれの子供と「交遊」したかどうかを尋ねた。その結果を表12に示す。この表から，高齢女性は子供に手段的サポート（「入院時の世話」，「借金」，「留守時の家の世話」，「家の手伝い」）や情緒的サポート（「心配事の相談」）を期待でき，更に，子供と「交遊」をしていることを読み取ることができる。このように，子供はさまざまな種類のサポートを提供できる，「百貨店型」のサポート源（前田 1999）であるといえる。

2）筆者が調査のためにメルボルンに滞在するとき，あるオーストラリア人の家族から家の一室を借りる。この家族の妻とその母親との関係は，メルボルンの老親子関係を知るのに役立つ。夫はインド系であり，妻はスコットランド系であった。夫はカトリックであったので，妻は結婚をしたときにカトリックに改宗した。夫はインド系であったけれども，家族は一般的なオーストラリア人の生活様式で暮らしていた。その家族は，台所，食堂，居間の他に，個室が7部屋ある2階建ての大きな家に住んでいる。筆者がその家族と6年前に知り合ったとき，家族には夫婦と4人の子供がいた。一番年下の子供はプリ・スクールに行っており，一番年長の子供はハイスクールの生徒であった。その家族は妻の母親と同居するために，10年前にその家を購入した。妻の母親は，1年間ほどそ

の家に住んでいた。しかし，育ち盛りの子供が４人もいて騒々しいということもあって，母親はその後その家から数キロのところにフラットを購入し，その家で一人暮らしをするようになった。夫婦は４年前に離婚をした。夫がインド系で，権威主義的に家庭内で振る舞っていたのが，離婚の原因であった。そして，夫はその家を出て，現在，妻であった女性と４人の子供がその家に住んでいる。年長の２人の子供は大学生になったが，その家でずっと暮らしている。妻であった女性は，次のように成人した子供との同居を説明していた。以前ならば大学生は親のもとを離れて自立して暮らしたけれども，最近では，家賃が高くなり，生活費もかさむようになったので，同居させている。そうすれば，２人の子供は家賃や食費を払わなくてよいから，生活が楽である。このように，妻であった女性は成人した子供との同居を説明していた。現在その女性の母親は白血病をわずらっているけれども，その女性の家の近くで一人暮らしをしている。その女性は彼女の姉と交代で母親の世話をしている。食事を作って母親のところに持っていってあげたり，年下の２人の子供が出る学芸会やスポーツの試合などに母親を連れて行ってあげたりしている。母親のために病院への送迎もしている。また，その女性は母親を週末に家に連れてきて，家族と一緒にすごせるようにもしている。

3）調査票による調査では，高齢女性がそれぞれのきょうだいにどのようなソーシャル・サポートを期待することができるか，および，過去３ヶ月以

表12　子供に期待できるソーシャル・サポート

高齢女性の名前	子供の性別	子供の年齢	入院時の世話	借金	仕事上の相談	心配事の相談	慰め	留守時の家の世話	家の手伝い	交遊
レスリー	息子	45歳						○	○	○
レスリー	息子	45歳								
レスリー	娘	43歳				○				○
レスリー	息子	43歳	○	○		○		○	○	○
レスリー	娘	41歳				○				
レスリー	娘	40歳	○			○				
レスリー	義理の娘	43歳	○							○
レスリー	義理の娘	35歳								○
マリリン	娘	43歳	○	○				○		○
マリリン	息子	41歳						○		○
ジュディス	息子	48歳		○						
ジュディス	娘	42歳	○							○
ジュディス	息子	41歳								○
ジュディス	息子	38歳								○
ノーマ	息子	54歳	○	○					○	
パム	娘	48歳	○	○						○
ジャネット	娘	40歳	○			○		○		○
ジャネット	娘	33歳	○	○				○		○

（注）○ソーシャル・サポートを期待できる，あるいは，交遊したことを示す。

表13　きょうだいに期待できるソーシャル・サポート

高齢女性の名前	きょうだいの性別	きょうだいの年齢	入院時の世話	借金	仕事上の相談	心配事の相談	慰め	留守時の家の世話	家の手伝い	交遊
レスリー	兄	72歳		○					○	
レスリー	弟	68歳		○					○	○
ジョー	姉	80歳								
ジョー	妹	71歳		○		○				○
マリリン	妹	62歳				○				○
ジュディス	妹	69歳								○
ノーマ	弟	74歳								
パム	妹	73歳								
パム	妹	71歳								○
ジャネット	妹	62歳	○	○		○				○

（注）○○はソーシャル・サポートを期待できる，あるいは，交遊したことを示す。

内にそれぞれのきょうだいと「交遊」したかどうかを尋ねた。その結果を表13に示す。この表から，高齢女性はきょうだいを情緒的サポート（「心配事の相談」）を期待する相手として考え，きょうだいと「交遊」をしていたけれど，きょうだいを負担の大きい手段的サポート（「入院時の世話」や「家の手助け」）を期待する相手とはあまり見なしていないことが分かる。ジャネットさんが「入院時の世話」を頼れたのは，頼む相手が62歳と若い女きょうだいだからと考えられる。また，レスリーさんが「家の手助け」を頼めたのは，頼む相手が男きょうだいであるからであろう。3人の高齢女性が手段的サポートである「借金」をきょうだいに頼めるのは，「借金」が労力を伴わない支援であるからだろう。高齢女性が「心配事の相談」をする相手はすべて女きょうだいであったが，これはそうしたサポートを同性に頼みやすいからと考えられる。

4）オーストラリア統計局（Australian Bureau of Statistics）が2002年におこなったジェネラル・ソーシャル・サーベイ（General Social Survey）によると，65歳以上の女性の29％が過去3ヶ月以内に教会活動ないし宗教活動に参加していた（ABS 2004）。とすると，紹介した高齢女性は同じ年代にある一般のオーストラリア人よりも教会活動に係わっているといえる。

5）オーストラリア統計局が2002年におこなったジェネラル・ソーシャル・サーベイによると，ボランティア活動をしている人の12％は宗教的信仰からおこなっているという（ABS 2004）。

6）前述のように，筆者は調査のためにメルボルンに滞在するとき，あるオーストラリア人の家族から家の一室を借りる。夫婦は4年前に離婚した。4人の子供たちはすべて母親と暮らすことを選択したので，母親は4人の子供たちと一緒に住むようになった。離婚裁判の判決で，もとの夫は年下の2人にかかる養育費の一部を負担し，一月に2度週末をその2人の子供とすごすこととなった。両親の離婚後，この家族の暮らしは次のようである。その家族は離婚によって家計が逼迫するようになった。しかし，両親が離婚したからといって，子供たちは離婚を悲しんではいなかった。むしろ，権威主義的に振る舞う父親がいなくなったから，子供たちは以前よりも生き生きと暮らしていた。ところで，日本では，両親が離婚すると子供たちが結婚などをしづらくなるというので，両親が離婚を思いとどまることもあるようである。しかし，メルボルンでは両親が離婚をした若者がたくさん身のまわりにいるから，筆者が懇意にしているその家族の子供たちは両親の離婚によって自分たちの将来が不利になってしまうとはまったく考えていないようであった。

（引用文献）

Allan, Graham, 1989, *Friendship: Developing a Sociological Perspective*, Hemel Hempstead: Harvester Wheatsheaf.（=1993, 仲村祥一・細辻恵子訳『友情の社会学』世界思想社.）

ABS, 2004, *Australian Social Trends, 2004*, cat. no. 4102.0, Canberra: Australian Bureau of Statistics (ABS).

ABS, 2007a, *Year Book Australia, 2006*, cat. no. 1301.0, Canberra: Australian Bureau of Statistics (ABS).

ABS, 2007b, *Australian Social Trends*, 2007, cat. no. 4102.0, Canberra: Australian Bureau of Statistics (ABS).

Gilding, Michael, 1997 *Australian Families: A Comparative Perspective*, South Melbourne: Longman

古谷野亘，1992，「団地老人におけるモラールと社会関係——性と配偶者の有無の調節効果」『社会老年学』17: 36-49.

Litwak, Eugene, 1960a, “Occupational Mobility and Extended Family Cohesion,” *American Sociological Review*, 25(1), 9-21.

Litwak, Eugene, 1960a, “Geographical Mobility and Extended Family Cohesion,” *American Sociological Review*, 25(3), 385-94.

前田尚子，1999，「非親族からのソーシャル・サポート」折茂肇編集代表『新老年学【第2版】』東京大学出版会，1116-28.

Martin, Jean I, 1967, “Extended Kinship Ties: An Adelaide Study,” *Australian and New Zealand Journal of Sociology*, 3(3), 44-63.

野邊政雄，2006，『高齢女性のパーソナル・ネットワーク』御茶の水書房.

吉原千賀, 2006, 『長寿社会における高齢期きょうだい関係の家族社会学的研究』学文社.

なお，オーストラリア統計局の出版物は，オーストラリア統計局のホームページで閲覧できる。そのURLは，http://www.abs.gov.au/である。cat. no.はオーストラリア統計局の出版物のカタログ番号である。

（当初，本稿で6人の高齢女性の事例を提示する

予定でしたが，７人の高齢女性の事例を紹介することにしました。そこで，本稿の（その１）（その２）（その３）で「６人の高齢女性の語りを提示する」と書いた部分を，「７人の高齢女性の語りを提示する」と訂正させていただきます。なお，本稿は，平成16年度～19年度日本学術振興会科学研究費補助金（研究代表者：野邊政雄，基盤研究（B）「オーストラリアの大都市に住む高齢者の社会的支援ネットワークの研究」，課題番号：16402027）による研究成果の一部である。